

平成 23 年 5 月 2 日現在

機関番号：13601
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21720068
 研究課題名（和文） 日中戦争期「魯迅」受容の多角的研究
 —小田嶽夫・竹内好・太宰治を中心に
 研究課題名（英文） Diversified research on reception of Rojin during the Sino-Japanese War (1937-45)—Takeo Oda, Yoshimi Takeuchi and Osamu Dazai
 研究代表者
 松本 和也（MATSUMOTO KATSUYA）
 信州大学・人文学部・准教授
 研究者番号：50467198

研究成果の概要（和文）：

日中戦争期に、魯迅がどのように日本の文学者において受容されたかについて、実証的な調査・分析を行った。魯迅に関する出版物の刊行状況ばかりでなく、小田嶽夫の伝記『魯迅伝』・竹内好の評論『魯迅』・太宰治の小説『惜別』といった文学者による書物を中心的検討課題としながらも、追悼文をはじめとした、日中戦争期の新聞・雑誌記事も精査し、魯迅受容の具体的な様相を記述し、その歴史的な意味について考察した。

研究成果の概要（英文）：

I researched reception of Rojin (Lu Xun) during the Sino-Japanese War (1937-45). I examined the publication situation and the article of Rojin. Especially, I paid attention to *Rojin-den* (Takeo Oda, 1941), *Rojin* (Yoshimi Takeuchi, 1944) and *Sekibetsu* (Osamu Dazai, 1945). And, I thought about the historical significance of reception of Rojin.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文学・文学・日本文学

キーワード：魯迅、小田嶽夫、竹内好、太宰治

1. 研究開始当初の背景

魯迅および魯迅受容の研究それ自体については、（網羅的にというわけではないにせよ）すでに中国文学研究の領域において豊かな蓄積がある。また、太宰治『惜別』につい

ては日本文学研究において、竹内好『魯迅』については日本思想史研究において、それぞれ一定量の研究が積み重ねられてきた。

ただし、上記2作品に、本邦初の魯迅伝記・小田嶽夫『魯迅伝』を加えた3作品は、日中戦争下のわずか5年間に集中して執

筆・発表されていながら、同時代性に注目した包括的な視野からの研究というものは、これまで構想されたことがなかった。『魯迅』と『惜別』の比較検討については先行研究があるが、小田嶽夫が日本文学研究においてほとんど論及されてこなかったことが、こうした死角を生み出すことになった一因だと思われる。

こうした研究状況（研究テーマ）に対して、申請者はこれまでの研究蓄積によって、3つの観点から準備を進めてきた。

第一に、主要検討対象の1つとした『惜別』の作者・太宰治については、『昭和十年前後の太宰治（青年）・メディア・テキスト』（ひつじ書房、2008年、全321頁）、『太宰治の自伝的小説を読みひらく「思ひ出」から『人間失格』まで』（立教大学出版会、2010年、全233頁）などをはじめとして、作品発表当時の歴史的状況を積極的に読みこんだ研究を継続的に展開してきた。

第二に、太宰治も含め、昭和10年代の文学状況については、「事変下メディアのなかの火野葦平一芥川賞「糞尿譚」からベストセラー「麦と兵隊」へ」（『Intelligence』、2005年11月、pp.79-91）や「富澤有為男『東洋』の場所、あるいは素材派・芸術派論争のゆくえ」（『文芸研究』、2008年3月、pp.49-61）をはじめとして、その時々々のベストセラーや論争、トピックなどを軸にした検討を積み重ねてきた。

第三に、中国を生涯の文学的テーマとした作家・武田泰淳についても研究を進め、特に「記録と思索—武田泰淳『司馬遷』精読」（『二松』、2008年3月、pp.249-273）では、日中関係に関わって、戦中／戦後をまたいだことで作家や作品が抱えこむことになった問題をとりあげてきた。

これら3つの交錯点に、今回の研究テーマは構想されており、それゆえ準備が整った上で臨んだものである。

2. 研究の目的

本研究では、日中戦争期（1937-45）の日本において、中国文学者・魯迅（1881-1936）が具体的にどのように受容され、表象されていたのかという問いを立て、それについて実証的な調査に即した分析・考察を行い、その上で、その意味づけを行うことまでを目的としている。

具体的には、小田嶽夫の伝記『魯迅伝』（1941）・竹内好による評論『魯迅』（1944）・太宰治の小説『惜別 医学生頃の魯迅』（1945）を中心的な検討課題とし、あわせて魯迅に論及した日中戦争期の新聞・雑誌記事も精査し、その受容の様相と特徴を多角的に検討する。

上記3作品については、個別のテキスト（内容）分析や執筆経緯、刊行当時の反応はもとより、3人の文学者・3作品相互の直接的・間接的な影響などを測定しながら、それぞれの魯迅表象の特徴を明らかにするとともに、それらを日中戦争期における魯迅受容の傾向として包括的に分析し、歴史的な意味づけも行う。

以上が、本研究の目的である。

3. 研究の方法

「日中戦争期「魯迅」受容の多角的研究—小田嶽夫・竹内好・太宰治を中心に」と題した本研究では、日中戦争期における魯迅の受容という研究テーマに即して、『魯迅伝』・『魯迅』・『惜別』を軸に、同心円状に幾重もの歴史的状況を調査・分析することで、魯迅という人物（像）や作品個々への理解の深化に留めず、それを含めたより広範な日中文化交流の軌跡を調査に基づき、実証的に示すことを目指す。

そのため、個々の作品のテキスト分析やそれらの相互比較・検討はもとより、それらを包みこんでいた同時代のコンテクストを、出版状況・新聞・雑誌の調査・分析によって分析・記述し、さらに、政治的・歴史的な脈を加味した上で、新聞・雑誌記事の言説分析も組みこむことで多角的に検討する。

最後に、日中戦争期における魯迅受容の実態を、それを取りまく諸条件と共に総合し、その特徴をまとめる。さらに、本研究を通じて明らかになった新たな研究領域・問題点を整理し、今後の研究展望を示す。

4. 研究成果

（1）平成20年度には、①魯迅受容に関する（中国文学・日本文学研究領域双方における）先行研究の再検討、②日中戦争期における文学シーンでの魯迅受容状況の把握、③『魯迅伝』・『魯迅』・『惜別』についての基礎的検討までを行った。以下、各項について具体的に詳述する。

①主に中国文学領域による魯迅受容に関する先行研究を再検討し、主要参考文献を確認するとともに、個別具体的なレベルでは、日中戦争期の文学シーンにおける魯迅受容という本研究のテーマが、エアポケットになっていることを（再）確認した。

②魯迅の死（1936）を端緒として、日中戦争期における日本の文学シーンにおいて、魯迅をめぐるどのような出版・言論状況が展開されていたかについて調査を試み、その概要把握に努めた。日本国内における魯迅関連

著作物の出版状況、魯迅死後における追悼文、さらには主要総合誌・文芸誌・新聞を通覧し、魯迅に論及した記事を調査・収集し、そこに描かれた魯迅像・魯迅評価について分析を試みた。

その際、『魯迅伝』・『魯迅』・『惜別』が集中的に発表される以前の)日中戦争当初において、質量共に重要な魯迅に関わる発言をしていた文学者として、佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫に注目した。そこでは、昭和初年代までつづくプロレタリア文学陣営による魯迅受容以降の、主要な傾向が3人の作家によって体现された、過渡的な様相を明るみに出すことができた。中野重治がプロレタリア文学系統の受容をひきついでいった反面、魯迅の翻訳者としても重要な役割を担った佐藤春夫は、魯迅を顕揚しつつも、「東洋の文学者」として意味づけていこうとする志向性が明らかであった。その中で小田嶽夫は、「偉大な文学者」として魯迅を捉え、その内面・心境に共感を示すかのような受容を、エッセイ・小説において示していった。

こうした、3人の文学者を軸とした日中戦争期(昭和10年代)の魯迅受容の動向については、すでに論文化して発表した(次項「5. 主な発表論文等」参照)。

さらにいえば、魯迅というモチーフを書きつづけていくことになる小田嶽夫という作家の、研究対象としての重要性も再認識することができた。

③主要検討対象である『魯迅伝』・『魯迅』・『惜別』といった魯迅を描いた3つの書物、および、それぞれの書き手について同時代評も含めた先行研究の収集・批判的検討を行った。その上で、3人の文学者間相互の言及も収集し、各書物における魯迅表象における特徴とそれぞれの相互比較について、基礎的な検討を行った。

(2)平成21年度には、①小田嶽夫『魯迅伝』の読解・分析、②竹内好『魯迅』の読解・分析、③『惜別』の読解・分析、④上記三作品の包括的な比較・検討、⑤成果のまとめと今後の課題の提示、までを行った。以下、各項について具体的に詳述する。

①小田嶽夫『魯迅伝』については、まずはその本文の形成過程に注目した。代表作として知られる初刊単行本『魯迅伝』(筑摩書房、昭和16年3月)の前後には、5種類の本文が存在する。原型となった雑誌発表の「魯迅伝(第一回)」(『新風』昭和15年6月)と「魯迅伝(第一～三回)」(『新潮』昭和15年9月～11月)、さらに、本文の修正を加えながら刊行されていった、『魯迅の生涯(人間選書6)』(鎌倉文庫、昭和24年9月)、『魯

迅伝』(乾元社、昭和28年7月)、『魯迅伝(大和選書5)』(大和書房、昭和41年10月)の各版である。本研究では、『魯迅伝』(筑摩書房、昭和16年3月)を軸にすえながらも、その特質を精確にとらえるための準備作業として、『魯迅伝』群にどのような本文異同があるかを、6種類の本文の比較検討から明らかにし、論文にまとめた(次項「5. 主な発表論文等」参照)。

さらに、この作業成果をふまえつつ、『魯迅伝』発表当時の書評、記述の書法、本文異同のもつ意味についてそれぞれ検討を加え、それらを総合することで、小田嶽夫が『魯迅伝』において示すことになった魯迅受容の特徴を明らかにした。これは、「偉大な文学者」として魯迅をとりだす、それまでの小田の受容の特徴をひきつぎつつ、そのような文学者を形作っていった基底的要因として、中国現代史という「環境」があったことを、政治的な含意をていねいに排しながら示したものだといえる。

②竹内好『魯迅』は、竹内好の思想的出発であると同時に、近代の日中関係について思考する際の古典的名著として、すでに定評を得た書物であるが、本研究ではそれを日中戦争期の、限られた情報・視点から書かれた、魯迅受容の一形態を示す書物とみなして研究を進めた。

そこで特徴的なのは、中国文学を専攻する「学者」としてのスタンス・記述である。本書において竹内は、伝記事項や作品上に見出した「謎」に対して、実証主義的なアプローチによって迫りながらも、推論や飛躍を徹底して排し、わかったことと不明なことをはっきり峻別して示していく。これが、『惜別』など、日中戦争期においてすでに進行していた、魯迅(像)を様々な面で美化しながら描き出す同時代の動向への批判を含んでいることはいままでもない。

しかも本書には、竹内好という思想家が、時の国内情勢との相剋において、魯迅を考えると同時に自己を問うた軌跡がみられる。(竹内は、本書を書きあげた後、出征していく)。その意味では、日中戦争期に、「難問としての中国・魯迅」をいかに書き得るのかという思想課題に対する、実践的な応答ともみられる一面をもつ。

③太宰治『惜別』は、作家としては研究の厚い太宰治の作品でありながら、「大東亜共同宣言」の文学化された作品、いわゆる「国策小説」だという出自もあり、研究対象としては回避される傾向にあった。それでも、一定量の先行研究があり、イデオロギーとの関わりにおいて両義的な意味づけ(国策順応／抵抗)がなされてきた。

本研究では、それらの成果を踏まえつつも、今一度作品それ自体をいねいに読解・分析することで、2つの特徴を明らかにした。1つは、この小説自体が、ある魯迅像を批判しながら、別の魯迅像を描き出すことによって、受け手の立場・条件によって複数の魯迅像が同時に成立することを実践的に示した作品であることである。もう1つは、「大東亜共同宣言」のうち「独立親和」がテーマとして課された小説でありながら、その実、様々なレベルにおいて、表面的な言葉の理解の水面下で誤解が構成されている、いわば〈不和〉という主題（の偏在）が見出せるということであった。

この2点に、若き日の魯迅を描き、竹内好の厳しい批判を被りながらもなお、本作が日中戦争期における魯迅受容という観点から欠かすことのできない、重要な作品であるといえる。

④ここまでの成果を総合しながら行ったのが、小田嶽夫『魯迅伝』・竹内好『魯迅』・太宰治『惜別』の包括的な比較・分析である。これらは、日中戦争期の近い時期に発表されながら、三者三様の魯迅像を提出することとなった。小田嶽夫は、増田涉や中野重治らに学び、太宰治は小田嶽夫に学ぶことで（竹内の著書は、執筆後に入手する）、それぞれに新たな魯迅像を伝記／小説という形で描いていった。一方、竹内好は（戦時下の太宰治を高く評価していたにもかかわらず）『惜別』を厳しく批判し、また小田嶽夫についても辛い点をつけていく。その根拠は、端的に言えば魯迅像が歪められているということにあった。

とはいえ、唯一客観的な魯迅像が、ことに日中戦争期に描き得るということもなく、そのことは太宰治『惜別』に小説として描かれたことでもあった。また、今日では、中国文学研究者によって、必ずしも竹内好の魯迅像が正しく、太宰治のそれが間違っているというわけでもないことが論じられている。本研究でとりあげた、魯迅を主題とした3作品もまた、限られた情報の中で、3人の文学者がそれぞれの立場・条件において描き出した魯迅像であり、それぞれに正／誤ではなく魯迅受容の特質を見出すことが、研究としては生産的である。小田嶽夫は、作家として、中国現代史を併記しながらも、（政治的なスタンスに関して）客観的・中立的に「文学者としての魯迅」を描き、竹内好は中国文学研究者として魯迅に寄り添いながら学問的厳密さをもって「思想家としての魯迅」を描いた。太宰治は、作家として、特に日本留学時代の魯迅をクローズアップすることで、日本という環境を導入しながら、「文学を志す魯迅」を描いた。

これらは、単にそれぞれの文学者の資質に帰せられるものではなく、日中戦争期において、魯迅というモチーフに何を見出し、どのように受けとめたか、その同時代におけるポイントと振幅を示したものといえる。逆にいえば、この時期の魯迅受容は、単にその様相を明らかにするばかりでなく、そこに関わっていたコードや中国認識をも浮かび上がらせる「装置」でもあったといえることができる。

（その意味で、3人の文学者は個別具体的な実践を提出したと同時に、日中戦争期を生き延びた知識人のサンプルでもあったといえる。）こうした考察については、研究会で報告した（次項「5. 主な発表論文等」参照）。

⑤本研究を通じて、上記の成果をあげるとともに、新たな研究領域・問題点を見出すことができた。1つは、日中戦争期における魯迅受容から視野をさらに広げて、同時期に、中国がどのように文学作品上で描かれていたか、というものである。いわば、「日中戦争期における中国の文学的表象」の研究という課題である。この研究では、当該テーマについての成果に加えて、魯迅受容の同時代的な位置づけを、より精確に示すことも可能になるはずである。もう1つは、小田嶽夫『魯迅伝』の本文異同研究から見出されたものとして、魯迅受容の研究を、戦後にまで対象時期を拡張して行う構想である。『魯迅伝』各版をみる限りでも、戦中／戦後は魯迅受容にとっても一大転機となっており、多くの魯迅関連書物が刊行されていく戦後の状況を調査・分析していくことも、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 松本和也、「小田嶽夫『魯迅伝』の本文異同」、単著、『ゲストハウス』、査読無、第3号、2011年4月、pp. 32-182
- ② 松本和也、「昭和一〇年代における魯迅受容一面—佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫—」、単著、『立教大学日本文学』、査読無、第104号、2010年7月、pp. 111-121

〔学会発表〕（計1件）

- ① 松本和也、「日中戦争期の〈魯迅〉表象分析」、単独、「太宰治スタディーズ」の会 2010年11月22日、コラボ産学官プラザ in TOKYO

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 和也 (MATSUMOTO KATSUYA)

信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：50467198